

児早期からの保育のプラス面あるいはマイナス面について実証的に研究するものである。第1年度は、諸外国及びわが国におけるこのテーマに関する文献検索を行い、国外研究94点、国内研究39点、計133点を類型化の上、主要な文献を収集し、文献考察をすすめることによって、これを実証的に把握することとした。

文献は五つの類型に分けた。＜アタッチメント研究的アプローチ＞はアタッチメント理論に基づく、母親や保育者への愛着形成から保育効果をみたものである。＜縦断研究的アプローチ＞は、保育を受けた時期から、その後、縦断的に追っていき保育効果をみたものである。＜認知発達のアプローチ＞、＜行動発達のアプローチ＞は、それぞれ言語発達や知的能力の発達について、また攻撃行動など一般的に問題行動と受けとめられる行動や不適応行動などの生じ方と保育経験との関連についてみたものである。＜総合分析的アプローチ＞は、とくにこれらの

保育効果に関する縦断的研究の文献を分析し検討したものである。

文献を解読し、それぞれを該当する類型に分類し、またそれぞれの保育効果について、保育の影響をプラス（○）、マイナス（×）、どちらともいえない（△）の3つに分類した。

それらを総合的にまとめたものが、表3である。同一文献であっても複数の類型に分類したものがあるので、133点の文献の累計は、148点となった。それぞれの類型別に、保育効果の分析結果を簡単に示した。全体的には、○が19点、△が120点、×が9点と、△乃至○が多いことが特徴的である。

本研究の主旨からみて、中でも縦断研究の経過及び結果を重要な視点におく必要があると考えられる。国外研究では、米国のNICHD（National Institute of Child Health and Human Development：国立小児保健・人間発達研究所）が国家的プロジェクトとして1991年に開始した

表3 保育効果の総合的分類

アタッチメント研究的アプローチ 国外文献57、国内文献3	国外文献：57＜内訳 ○；1，△；52，×；4＞ 国内文献：3＜内訳 ○：0，△；3，×；0＞ 初期の研究では×も見られたが、全体としては△が多い。近年は保育者とのアタッチメントが安定していれば○との報告も見られる。
縦断研究的アプローチ 国外文献8、国内文献3	国外文献：8＜内訳 ○；0，△；7，×；1＞ 国内文献：3＜内訳 ○：0，△；3，×；0＞ △が多い。
認知発達のアプローチ 国外文献13、国内文献2	国外文献：13＜内訳 ○；6，△；5，×；2＞ 国内文献：2＜内訳 ○：0，△；2，×；0＞ ×は非常に少なく、○が比較的多い（ただし、長期的には△のものが多い）。とくに教育的介入計画に基づく研究ではほぼ全て○。
行動発達のアプローチ 国外文献28、国内文献30	国外文献：28＜内訳 ○；10，△；16，×；2＞ 国内文献：30＜内訳 ○：2，△；28，×；0＞ 初期の研究に×が2件みられるが、とくに最近の研究では△が多い。○は保育の質が高い場合という条件のもとで多い。
総合分析的アプローチ 国外文献0、国内文献4	国外文献：0 国内文献：4＜内訳 ○：0，△；4，×；0＞ △が多い。

追跡研究が注目される。かつて1960年代に米国で開始されたプロジェクトヘッドスタートは、早期教育介入として注目された。多民族・人種で構成され、多様な属性を併せ持つ米国における保育は、家庭養育を補完し、支援することによって、貧困や、文化上の問題、家庭養育問題から生じる乳幼児の発達上の課題解決に一定の効果を持つことは、予測される。しかしNICHDのプロジェクト研究は、さらにわが国のような工業先進国における子育ての社会化の必要性を踏まえた保育のあり方を考える上でも、示唆するものが多い。とくに乳児期や幼児早期からの母親の就労と保育経験に関する研究の知見は、参考とするものが含まれている。この研究はさらに今後も、継続して報告される予定であるが、質の高い保育が、母子関係や愛着関係によい影響を与えること、問題行動の発生との関連は少ないこと、認知・言語能力の高さ、就学レディネスの高さに関連していることについて、さらなる追跡研究の結果が注目される。一方、長時間保育あるいは長期間の保育に関しての、やや逆の結果にも、注目する必要がある。本研究の第2の分担研究の結果と照合し、また分担研究者安梅勅江の緒言でふれている保育者と母親との問題行動に関する受け止め方の相違は、家庭養育環境と地域・社会の子育て環境、そして保育環境に及ぼす子どもへの影響を考える上でも今後の追跡研究結果に注目したい。

近年のわが国における菅原ますみの研究も、1980年代後半から開始された継続的縦断研究として注目されている。これまでのところ、むしろ母親の就労や保育経験があることと、子どもの問題行動の少なさと関連が高いことを示すということで注目されている。

さらに、本年度の文献研究から得られた重要なポイントあげると、まず、乳幼児期から母親が就労すること、乳幼児期から母親から離れて保育を受けることについて、一般的に「子どもにとってよくない」という見解が多くみられるが、しかし、これまでのとくに縦断的なアプロ

ーチを加えた客観的、科学的研究を精査した結果からは、マイナスの影響ありとする結果は非常に少ないことが、あらためて示されている。母性神話、三歳児神話や保育是非論を超えた子育て観、子ども観の確立が求められる。

次に、保育を経験することは、即ち主要な愛着の対象である実の親とくに母親との分離を体験することであるという観念のもとで研究されていたアタッチメント研究的アプローチでは、乳児期からの母親の就労等による母子分離や保育経験は、母子関係・愛着関係の弱さと結びついていた。しかし、近年の研究は、この従来の研究デザイン、即ち母子間の分離への子どもの反応から評定することへの問い直しを求めていると考えられる。しかも、多くの先行研究からは、保育を受けることそれ自体が親子のアタッチメントを阻害するという知見はほとんど得られていない。保育を受けている子どもは、家庭の中で親とかかわるだけでなく、保育者との相互作用を日常的に経験し、保育者へのアタッチメントを形成している。したがって、親子のアタッチメントのみならず、保育者へのアタッチメントの形成にかかわるケアの質、保育環境の質について同時に検討することが重要であると考える。

さらに、今回の文献研究による精査の結果は、乳幼児期からの保育の経験そのものが、その後の問題行動、不適応行動を生じさせる上で直接影響を及ぼすということはおおむねないであろうということを示唆するものであった。保育環境においては、保育の質、とくに保育者との関係のあり方が非常に大きな要因となることが多くの研究から指摘されており、保育の質の高さのポジティブな影響に関しては様々な知見が得られている。

E. 結論

以上、第1年度研究の総合的考察から結論として示すことができるものは、以下の通りである。

乳児期あるいは幼児早期に、親（とくに実の母親）とともに家庭で過ごしたか否かという、単純な変数のみで判断することは、全く科学的ではない。この時期の子どもたちにとって最も重要なことは、家庭養育環境におけるケアの質、

保育環境におけるケアの質、そして対人関係における応答性豊かな、また感受性豊かな、人間的相互作用である。そのことに、家庭も社会も保育者も留意することが重要であると考えられる。

文献調査 I

国外文献：アタッチメント研究のアプローチ1

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1980	日常的分離におけるアタッチメント：保育と母親の就労についての再考 Attachment in Daily Separations: Reconceptualizing Day Care and Maternal Employment Issues.	保育を経験している子どものアタッチメントと就労している母親の子ども依存性についての諸研究。	Anderson, Christine Warren. Child Development, 51, 242-245.	諸研究を概観し、母親の就労による日常的な母子分離と複数養育が、子どもの発達とアタッチメントの維持に及ぼす影響を検討。 →保育と母親の就労とを別個に捉え、保育と家庭の双方におけるケアの質と安定性を考慮する必要がある。	△
1982	生活環境の変化に対する母子のアタッチメントと関係性の安定性—中流階級の非選択的サンプルにおいて Stability of Infant-Mother Attachment and Its Relationship to Changing Life Circumstances in an Unselected Middle-Class Sample.	43組の母子。	Thompson, Lamb & Estes. Child Development, 53, 144-148.	生後12.5ヵ月および19.5ヵ月時にアタッチメント測定と、家庭環境と養育環境の変化についての質問紙調査。 →アタッチメント分類において2時点の安定性は53%（下位分類では26%）。母親の就労や日常的な保育（非母親養育）など、家庭環境と養育環境の変化がアタッチメントの変化に関与している。ただし、その変化は安定から不安定、不安定から安定の双方が見られた。	△
1983	18ヵ月児における保育時間とアタッチメント行動 Length of Day-Care Attendance and Attachment Behavior in Eighteen-Month-Old Infants.	50組の18ヵ月児と母親。	Schwartz, Pamela. Child Development, 54, 1073-1078.	保育時間をフルタイム、パートタイム、なし、の3群に分け、家庭および実験室でのアタッチメント行動を比較。 →家庭におけるアタッチメント行動は3群間で有意差なし。実験室のストレンジシチュエーションでは、保育経験なしの子どもよりもフルタイムで保育を経験している子どもの方が、最後の再会エピソードにおける母親への回避が高かった。	△
1984	母親の就労形態と母親および父親へのアタッチメントの安定性 The Relation between Maternal Employment Status and the Stability of Attachments to Mother and to Father.	59組の親子。	Owen, Easterbrooks, Chase-Lansdale & Goldberg. Child Development, 55 1894-1901	生後12ヵ月時および20ヵ月時に母子と父子のアタッチメント測定。 フルタイム就労、パートタイム就労、就労なし、調査2時点間で就労形態に変化あり、の4群に分けてアタッチメントの安定性を検討。 →就労形態に変化のない3群では、就労の有無に関わらず、母子および父子のアタッチメントに変化なし。母親の就労形態に変化があった群では、母子のアタッチメントに変化はないが、父子のアタッチメントに相対的に大きな（46%）変化あり。	△

国外文献：アタッチメント研究的アプローチ2

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1985	発達早期における母親の就労が歩行期幼児、母親および父親に及ぼす影響 Effects of Early Maternal Employment on Toddlers, Mothers, and Fathers.	75組の20カ月児(第一子)とその父母。	Easterbrooks, M. & Goldberg, Wendy A. Developmental Psychology, 21, 774-783.	母子・父子のアタッチメント、親子の問題解決行動について実験的観察。家族の時間配分、子育てに関する態度について、両親への質問紙調査。 →母親の就労は、子どものアタッチメントおよび問題解決行動の発達に関連しないが、母親が子どもと過ごす時間の長さ(就労なし>フルタイム就労)、母親の子育てに関する態度(温かさ:就労なし>フルタイム就労、厳しさ:就労なし>パートタイム就労)、父親の子育てに関する態度(子への困惑・心配:就労なし>パートタイム就労・フルタイム就労)に有意差が見られた。	△
1986	就労している母親とその男児とのアタッチメントを促進する要因 Factors Promoting Secure Attachment Relationships between Employed Mothers and Their Sons.	30組の18カ月男児とフルタイム就労の母親。	Benn, Rita K. Child Development, 57, 1224-1231.	母親の機能性(就労と育児の統合、子の受容、子への敏感性)、養育状況(保育形態とその変化、就労復帰時の子どもの月齢)、母子のアタッチメントを測定。 →就労と育児を統合している母親は、子の受容や子への敏感性が高く、母子のアタッチメントが安定。アタッチメントが安定している母親の方が、就労復帰が早い。社会経済的地位や保育形態は、母子のアタッチメントに直接関連しないが、母親の就労と育児の統合に関連。母親の就労は、母親の養育スタイルや保育の決定において明らかに異なるような母親の情緒的狀態によって媒介され、アタッチメントに影響を与える。	△
1987	就労による母親の不在が母子のアタッチメントに及ぼす影響—ロースクサンブルにおいて Effects of Maternal Absence Due to Employment on the Quality of Infant-Mother Attachment in a Low-Risk Sample.	110組の母子(就労54組、就労なし56組)。ロースク、中流階級。	Barglow, Vaughn, & Mollitor. Child Development, 58, 945-954.	生後12-13カ月時にアタッチメント測定。 →就労なし群に比べて就労あり群の方が、「不安定—回避型」アタッチメントの割合が高かった。ただし、この結果が該当するのは、フルタイム就労の母親の第一子のみ。このような母子において、日常的な分離経験は、「不安定—回避型」アタッチメント形成のリスク要因となる。	△
1987	家族の文脈における母親の就労:母子および父子のアタッチメントに及ぼす影響 Maternal Employment in a Family Context: Effects on Infant-Mother and Infant-Father Attachments.	母親が就労していない家族57組、就労している家族40組。	Chase-Lansdale, P. & Owen, Margaret Iresch. Child Development, 58, 1505-1512.	生後12カ月時にアタッチメント測定。 →母子のアタッチメントは、母親の就労形態と関連なし。父子のアタッチメントは、母親が就労している家庭の男児のみ、不安定である割合が高い。両親へのアタッチメントは、母親が就労している家庭の男児において(就労している家庭の女児および就労していない家庭の男児・女児に比べて)、不安定である割合が高い。母親と父親の性別分業行動の違いや、男児の社会的ストレスへの脆弱性を示唆。	△

国外文献：アタッチメント研究的アプローチ3

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1988	生後1年目における非母親養育と親子のアタッチメントの安定性 Nonmaternal Care in the First Year of Life and the Security of Infant-Parent Attachment.	149名の健康な第一子 (男児90名、女児59名)。	Belsky, Jay & Rovine, Michael J. Child Development, 59, 157-167.	生後12～13カ月時にストレンジシチュエーション法によるアタッチメント測定。 →週20時間以上の非母親養育を経験している乳児は、再会時に母親への回避をより高く示し、母子のアタッチメントが不安定。週35時間以上のフルタイム就労をしている母親の男児は、他の男児よりも父子のアタッチメントが不安定。したがって、週20時間以上の非母親養育を経験している男児は、他の男児よりも母子および父子のアタッチメントが不安定。生後1年目からの長時間にわたる非母親養育は、不安定なアタッチメントの発達へのリスク要因である。	×
1988	乳児保育の影響についての再考 The 'Effects' of Infant Day Care Reconsidered.	(レヴュー)	Belsky, J. Early Childhood Research Quarterly, 3, 235-272.	フルタイム就労の母親の乳児は、パートタイム就労の母親および就労していない母親の乳児に比べて、不安定なアタッチメント関係を示す傾向があるという結果がみられている。生後1年以内のフルタイムの乳児保育は、その後の発達にとってリスクである。生後1年目から母親以外の養育を長時間うけると不安定アタッチメント(回避型愛着)が形成される。回避型愛着は、幼児期および児童期前期の攻撃性や非従順に関連があるとされており、したがって、早期から母親がフルタイム就労することは、子どもの攻撃性や非従順を高めることになる。また、就労している母親は、関わりの時間が少ないことを埋め合わせようとして子どもに過剰に刺激を与えるため、子どもは疲れてしまい、過剰な刺激を拒絶しようとして回避的な行動をとるようになる。	×
1988	「乳児保育の影響についての再考」の再考：親、子、研究者にとつてのリスク “The 'Effects' of Infant Day Care Reconsidered” Reconsidered: Risks for parents, children, and researchers.	(レヴュー)	Clark-Stewart, K.A. Early Childhood Research Quarterly, 3, 293-318.	Belskyの説には根拠がなく、多くの家庭を傷つけるもの。共働きの家庭は仕事と育児の両立に苦労しているし、母親は就労に懸念や罪悪感を抱いている。母親の就労と子どもの攻撃性・非従順との間に直接的な関連があるわけではない。回避型が多く見えるのも見かけ上のことで、就労している母親の子どもは日常的に分離に慣れているので、ストレンジシチュエーションにおいて愛着行動が活性化されなかつただけ(分類が間違っている可能性がある)。	△

国外文献：アタッチメント研究のアプローチ4

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1989	乳児保育：有害か？ Infant Day care: Maligned or malignant ?	(レヴュー)	Clarke-Stewart, K. Alison American Psychologist,44,266-273.	フルタイム就労の母親は、パートタイム就労や専業主婦の母親に比べて、子どもとの間に不安定な愛着（ほとんどが回避型）を形成することがわずかに多いとの知見が提出されている。しかし回避型について比べると、フルタイム就労の母親は、専業主婦の母親よりも8%多いだけ。「しかもこれは見かけ上のこと。就労している母親の子どもは日常的に分離に慣れているのでストレンジシチュエーションにおいて愛着行動が活性化されなかつた」と説明。 → 母親が就労している場合、子どもがどのような保育を受けているかを考慮する必要がある。就労している母親の子どもにとつて重要なのは、保育の質であつて、よい保育との出会いがあれば家庭の保育の質に問題があつても、子どもにも及ぼす影響を軽減できる。	△
1989	キブツにおける乳児—成人アタッチメントと4年後の社会情緒的発達 Infant-Adult Attachment on the Kibbutz and Their Relation to Socioemotional Development 4 Years Later.	イスラエルのキブツにおいて養育された乳児59名（男児34名、女児25名）を縦断調査。	Oppenheim,Sagi,& Lamb. Developmental Psychology,24,427-433.	生後11〜14カ月時に、ストレンジシチュエーション法により、母親、父親、metapelet (careprovider) へのアタッチメントを測定。5歳時に、キブツのchildren's houseでの行動から社会情緒的発達を測定。一母子と父子のアタッチメントに関連は見られず、4年後の社会情緒的発達との有意な関連も見られなかつたが、metapeletに対してBタイプ（安定）アタッチメントを形成していた乳児は、Cタイプ（アンビバレント）アタッチメントの乳児に比べて、4年後に自我コントロールが少なく、共感的で、優勢で、目的を持ち、達成志向で、自立的。キブツにおける早期の社会生活の中でmetapeletが重要なアタッチメント対象であること、複数の重要な大人とのアタッチメント関係が発達的に重要であることについて問題を提起。	△
1989	レヴュー論文：乳児保育 Research in Review: Infant Child Care.	(レヴュー)	Howes, Carollee. Young Children,44,24-28	母親の就労、保育、子どもの発達と家庭および保育の影響との関連についての諸研究を概観。 → 保育それ自体が、将来の社会的・情緒的発達を規定するとはいえない。保育をうけている子どもにおいては、保育の影響と家庭の影響とを組み合わせると、最もよく子どもの社会的・情緒的発達を予測できる。子どもの母親への不安定なアタッチメントが、保育者との肯定的な関係性によって補償されうる。 今後の研究においては、保育者の安定性と諸特徴（資質）が非常に重要になる。	△

国外文献：アタッチメント研究的アプローチ5

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1990	専門的保育者に対する乳児のアタッチメントの質：親子のアタッチメントおよび保育の特徴との関連 Quality of infant attachment to professional caregivers: Relation to infant-parent attachment and day-care characteristics.	75名の乳児（平均15カ月齢）。	Goossens & van Ijzendoorn, Child Development, 61, 832-837.	保育者、母親、父親について、各マストレンジシチュエーションによるアタッチメント測定。自由遊び場面において、各愛着対象の敏感性を評定。保育の特質について評定。 →保育者へのアタッチメント分類は、母親および父親への分類と同様の分布を示し、母親・父親へのアタッチメントとは独立に形成されていた。約10%の乳児が3対象とも不安定なアタッチメントを形成。保育者との間で安定したアタッチメントを形成していた乳児は、一週あたりの保育時間が長く、中流階級の出身であり、その保育者は自由遊び場面での敏感性が高かった。	△
1991	不安定-回避型で保育を経験している乳児は、ストレンジシチュエーションにおいてよりストレスを経験せず、自立性を示すのか？ Are Insecure-Avoidant Infants with Extensive Day Care Experience Less Stressed by and more Independent in the Strange Situation?	週20時間以上の保育を受けている群および受けていない群から回避型と判断された子ども。	Belsky & Braungart, Child Development, 62, 567-571.	(Clarke-Stewart, 1989; 母親の就労により日常的に保育を受けている子どもに回避型が多いが、それは分類の間違いである、という指摘に対して) 被験児のストレンジシチュエーションにおける行動を比較。 →保育を受けている群の方が、再会エピソードで泣きやぐざりが多く、おもちゃや遊ぶことが少なかったことから、確かに回避型と判断できる。分類は間違っていない。	×
1992	質の閾値：施設保育における子どもたちの社会的発達への意味 Thresholds of Quality: Implications for the Social Development of Children in Center-Based Child Care.	保育所に入所している14～54カ月児、414名。	Howes, Carolee; And Others, Child Development, 63, 449-60.	保育における関係性の質（対大人、対仲間）を評価。 →集団の人数、保育者との比率が規準に達しているクラスは、ケアの質や活動が「good」[very good]と評定された。そのようなクラスの子どもは、保育者に対して安定したアタッチメントを形成。保育者に対して安定したアタッチメントを形成している子どもは、仲間との関わりにおいてコンピテント。	△
1992	子どもと養育者との関係性：母親および保育者 Children's Relationships with Caregivers: Mothers and Child Care Teachers.	3年間の縦断研究に参加している441名（生後10～56カ月）。	Howes, Carolee & Hamilton, Claire E, Child Development, 63, 859-866.	登園・降園時に母親との分離・再会を観察（110名）。保育時に保育者との関係を観察（403名、うち72名は母親との分離再会も観察）。 →保育者へのアタッチメントを回避、安定、アンビバレントの3群に分類。保育者からの敏感性関わりは、安定群、アンビバレント群、回避群の順に多かった。これは、母親へのアタッチメントと同様の結果。今後の研究では、子どもとの関係性（アタッチメント）と保育者の特質や行動との関連について検討が必要。	△

国外文献：アタッチメント研究的アプローチ6

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1992	子どもと保育者との関係性：時間的一貫性と親へのアタッチメントとの一致 Children's Relationships with Child Care Teachers: Stability and Concordance with Parental Attachments.	2つの縦断研究への参加者（72名、106名）を乳児期から就学前まで追跡。	Howes, Carolle & Hamilton, Claire E. Child Development, 63, 867-878.	母親へのアタッチメントは、ストレンジジチュエーション、4歳時の再会行動、アタッチメントQセットによって測定。保育者との関係性は、アタッチメントQセットにより測定。 一保育者との関係性（アタッチメント）は、保育者の交代がなければ一貫。保育者の交代があった場合、生後30ヵ月までは一貫しない。生後30ヵ月以降は、保育者交代の有無にかかわらず、関係性の質は一貫している。母親へのアタッチメントと保育者へのアタッチメントは一致しない。母親および保育者へのアタッチメントと、保育開始時期や保育時間との間には関連が見られなかった。	△
1992	非母親保育と母子のアタッチメントの安定性 Nonmaternal Care and the Security of Infant-Mother Attachment: A Reanalysis of the Data.	13研究（897名）のデータを再分析。	Lamb, Stermberg, & Prodiromidis. Infant Behavior and Development, 15, 71-83.	生後11～24ヵ月時における母子のアタッチメントの安定性を検討。 一週5時間以上の日常的な非母親保育を受けている子どもには、母親養育のみの子どもに比べて、安定したアタッチメントが多く見られず、回避のスコアも高かった。不安定なアタッチメントが多く見られたのは、生後15ヵ月以降にアタッチメントを測定した子どもや、7～12ヵ月に保育を開始した子ども（7ヵ月以前は該当せず）であった。 保育時間は、アタッチメント分類に関連が見られず、週20時間以上の保育であっても、不安定なアタッチメントは多くなかった。パートタイム保育は、年少児においてはアタッチメントの安定性と関連したが、年長児においてはアタッチメントの不安定性と関連した。	△
1993	就労とアタッチメントとの関連：母親の分離不安と相互作用行動の媒介的効果 Linking Employment to Attachment: The Mediating Effects of Maternal Separation Anxiety and Interactive Behavior.	73組の母子。	Stifter, Coulehan, & Fish. Child Development, 64, 1451-60.	5ヵ月時および10ヵ月時に実験室での自由遊びを観察。18ヵ月時にストレンジジチュエーションによりアタッチメントを測定。子どもの分離時における母親の感情は、5ヵ月時に質問紙調査。 一分離不安が高く、就労している母親は、10ヵ月時において侵入的な行動が多く見られた。就労は、直接アタッチメントに関連しないが、分離不安が高く就労している母親の子どもは、不安定-回避型アタッチメントを発達させる。就労とその後の発達との間を媒介するのは、母親の分離不安と相互作用スタイルであろう。	△
1994	子どもの仲間関係：保育者との関係性の諸側面との関連 Children's relationship with peers: Differential associations with aspects of the teacher-child relationship.	乳児期から保育経験のある4歳児48名の縦断データ。	Howes, Carolle; Hamilton, C.E. & Matheson, C.C. Child Development, 65, 253-263	社会的コンピテンズ（対仲間）と保育者-子どもとの関係性との関連を検討。 一歩行期において、保育者との関係性の安定は、攻撃性の低さ、仲間との複雑な遊び、社交的な行動と関連。就学前においては、保育者との関係性の安定が、向社会的行動およびひきこもり行動と関連。保育者への依存性は、仲間間の引きこもり、攻撃性と関連。	△

国外文献：アタッチメント研究のアプローチ

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1994	母親、教師、および保育経験の仲間関係との相関 Maternal, teacher, and child care history correlates of children's relationships with peers.	異なる時期（乳児期：平均5.4ヶ月、歩行期前期：平均18.7ヶ月、歩行期後期：平均32.7ヶ月、就学前期：平均40.5ヶ月）に保育を開始した84名。	Howes, Carolee; Matheson, C.C. & Hamilton, C.E. Child Development, 65, 264-273	4歳時の社会的コンピテンスを、親しい仲間とそうでない仲間との双方で評価。12ヵ月時および4歳時に、母親へのアタッチメントを測定。最初の教師と4歳時の教師について関係性を評価。 →4歳時の社会的コンピテンスに関連しているのは、最初の教師および4歳時の教師との関係性。母親へのアタッチメントは、12ヵ月時も4歳時も社会的コンピテンスを予測しなかった。 保育開始時期は関連なし。	△
1994	キブツの共同体における家庭外での就寝：母子のアタッチメントに差異をもたらす Sleeping Out of Home in a Kibbutz Communal Arrangement: It Makes a Difference for Infant-Mother Attachment.	48名の乳児（14-22ヶ月）。共同での就寝群（男児13名、女児10名）と家庭での就寝群（男児13名、女児12名）の2群。	Sagi, van Ijzendoorn, Aviezer, Donnel, & Mayseless. Child Development, 65, 992-1004.	就寝場所（共同/家庭）の2群で母子のアタッチメントを比較。 →2群間で、子どもの気質、早期のライフイベント、母子の遊び場面の相互作用、昼間の保育の質、母親の諸変数に差異なし。家庭で就寝している子どもの80%が、母親に対して安定したアタッチメントを形成。共同で就寝している子どもは48%。共同で就寝することは、進化的にみて適応的な環境から逸脱した育児環境であると考えられる。	△
1994	乳児保育、アタッチメントとファイリング引き出し問題 Infant Day Care, Attachment, and the File Drawer Problem.	105名の12ヶ月児。	Roggman, Langlois, Hubstaui, & Rueserdanner. Child Development, 65, 1429-1443.	乳児保育とアタッチメントについての研究は、'file drawer'研究の応用可能性のなさ、統計的に有意でなかった未発表データによって、バイアスがかかっている。 追試は、保育とアタッチメントとの関連を明確にするために必須である。本研究は、Beiskyによって、保育を受けている子どもは不安定なアタッチメントを形成するリスクが高い、と結論づけられた4つの研究の追試。 →先行研究と同様の結果は得られなかった。むしろ、ネガティブなアタッチメントは、フルタイム保育よりも、パートタイム保育に関連している傾向がみられた。全体として、保育とアタッチメントとの関連を検証するために研究で用いられている特定の測定、フルタイムあるいはパートタイムの規準、統計的な技術といったものが、これらの研究結果に影響を与えていることが示唆された。	△

国外文献：アタッチメント研究的アプローチ⑧

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1994	南ドイツにおける6歳児のアタッチメントパターン：乳児期からの予測可能性とpreschoolの行動に対する意味 Attachment Patterns at Age-6 in South Germany: Predictability from Infancy and Implications for Preschool Behavior.	南ドイツの6歳児と母親40組。	Wartner,Grossmann, Fremmerbomik,& Suess. Child Development,65,1014-1027.	乳児期のアタッチメントパターンと6歳時の再会場面における反応パターンとの一致率についての異文化間における追試。 →アタッチメント4タイプの乳児期と6歳時の一致率は82%。6歳時に安定群(B)に分類された子どもは、不安定群(A,D)に比べて、5歳時におけるpreschoolでの観察で、遊びの質やいざこざの解決においてコンピテントで、行動上の問題が少なく、社会的知覚絵画テスト(social perception picture test)において敵意を知覚することが少なかった。6歳時に無秩序型(D)に分類された子どもは、回避型(A)と同様、5歳時においてコンピテントでない行動集団に所属していることが多く、集団に適応している安定型の子どもとは独立しており、6歳時の無秩序型は不安定なアタッチメントであると考えられる。	△
1994	保育者の恒常性(安定性)と保育者に対する歩行期幼児のアタッチメント関連行動 Caregiver Stability and Toddlers Attachment-Related Behavior towards Caregivers in Day Care.	保育者と歩行期幼児。	Barnas,MV. & Cummings,EM. Infant Behavior & Development,17,141-147.	日常的な保育において、恒常的(いつも関わっている)保育者と非恒常的保育者への歩行期幼児の反応を観察。 →苦痛を感じた幼児は、非恒常的保育者よりも恒常的保育者に対して、より多くのアタッチメントに関連した行動(近接・接触要求、遠隔的相互作用)を示し、恒常的保育者の方が子どもがより主体性を発揮してなだめることができた。苦痛を感じていない文脈(遊びなど)において、幼児は恒常的保育者に対しての方がより主体性を発揮しており、恒常的保育者の方がより多く「安全基地」として利用されていることを表している。この結果は、恒常性(安定性)が養育者ともとのアタッチメントの発達を促進するとの見解に一致している。	△

国外文献：アタッチメント研究のアプローチ⑨

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1995	乳児保育および母子のアタッチメントの長期的結果 The long-term consequences of infant day-care and mother-infant attachment.	生後42カ月から小学校低学年までの縦断調査。ハ伊利スクサンプル。	Egeland, Byron; Hiesler, Marnie. Child Development, 66, 474-485.	母子のアタッチメントと保育が、子どもの社会的情緒的適応にどのような効果を持っているかを検討。 →ハ伊利スクサンプルでは、子どもの適応への保育の影響は、母子のアタッチメントの質によって異なる。母子のアタッチメントが安定している場合、保育はネガティブな影響を及ぼすが、アタッチメントが不安定な場合はポジティブな影響を及ぼす。42カ月時に母子のアタッチメントが安定していた群では、家庭養育の子どもに比べて、保育を受けている子どもは保育場面でネガティブで回避的、kindergartenでは、より攻撃的で行動化が見られる。一方、母子のアタッチメントが不安定な群では、保育を受けている子どもの方が引込み思案でなく、主体的である。全体として、保育を経験している子どもは、家庭養育の子どもに比べて幼稚園での問題行動が多いが、小学校になると両者の差異がなくなる。家庭養育の子どもにおいては、アタッチメントの安定は将来の適応に関連するが、保育を受けている子どもにおいては、アタッチメントは将来の適応を予測しない。	△
1995	子どもと保育者：関係性のプロフィール Children and their child care caregivers: Profiles of relationships.	1379組の保育者と子ども(女児682名)。72%が施設保育(平均37.15カ月)、残りは家庭的保育(平均24.72カ月)。	Howes, Carollee; Smith, Ellen W. Social Development, 4, 44-61.	アタッチメントQセットの項目の5つの下位尺度を用いて、保育者の評定をクラスター分析。 →difficult, avoiding, secureの3プロフィールを抽出。Avoidingプロフィールは、安定性得点が低く、アタッチメントの安定性が最も低いと考えられる。保育者と子どもとの関係性をアタッチメントとして把握できる。	△
1995	保育の質と保育者の行動、子どもの遊び行動、情緒的安定性、認知的行動との関連 Relations among Child Care Quality, Teacher Behavior, Children's Play Activities, Emotional Security, and Cognitive Activity in Child Care.	施設保育をフルタイムで経験している生後10~70カ月の840名(女児435名)。	Howes, C. & Smith, E.W. Early Childhood Research Quarterly, 10, 381-404.	保育者との関係性、遊び行動、認知的活動について保育場面で観察。 →子どもの認知的活動の一部は、保育者との肯定的な社会的相互作用、保育者へのアタッチメントの安定性、そして創造的な遊びに参加することによって説明される。	△

国外文献：アタッチメント研究的アプローチ10

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1996	親以外の養育が子どもへの発達に及ぼす影響：最新の知見 Effects of nonparental child care on child development: An update.	親以外による家庭外の乳幼児保育の影響について文獻のレビュー。	Lamb, ME Canadian Journal of Psychiatry- Revue Canadienne de Psychiatrie,41,330-342.	本質的な論争が続いているが、蓄積された証左は、親以外によるケアは乳幼児にとって、影響を与えうるものの有益でも有害でもない、ということを示している。保育者が子どもと関係性を確立した場合には、子どもの発達に重要な影響を与える。このことは、保育者がよく教育され、敏感に行動し、子どもの生活において短期間ではなく安定(連続)した対象として存在することの重要性をさらに明確にする。ただし、親以外による養育は、ケアの質が低く、子どもが安定した保育者と意味のある関係性を経験することができない場合、行動上の問題(攻撃性、非従順を含む)と関連する。家庭外の養育が子どもに及ぼす影響は、子どもの年齢や気質、個人的背景といった一人ひとりの特徴と同様に、ケアの質に依拠している。	△
1996	フランスの3、4歳児における乳児保育と社会情緒的発達との関連 The relationship between infant day care and socio-emotional development with French children aged 3-4 years.	フランスで生後3年間に多様な保育を経験した125名の3～4歳児。	Balleguier, G. & Melhuish, EC. European Journal of Psychology of Education,11,193-199.	早期の保育は、社会情緒的発達にとってリスク要因と考えられてきたが、研究の知見は明確でない。フランスにおいて、保育は乳児期から広く利用されており、多様なケアが存在していることから、この問題を探究することが必要。母親への面接により保育経験の歴史および家族の特徴について、母親と教師への質問紙調査により子どもの気質および社会的行動について、ストレンジジャーの接近および母親との分離・再会手続きにおける行動観察により子どものアタッチメント行動についてのデータを収集。一子どもの社会情緒的成達は、性別、保育の特徴、家族の特徴の交絡によって影響を受けている。	△
1996	保育開始年齢とアタッチメントの発達における敏感期 Sensitive periods in the development of attachment and the age of entry into day care.	生後6-29ヵ月で集団保育を開始した129名の2歳児。	Vain, Crugnola, Molina, & Ripamonti. European Journal of Psychology of Education,11,215-229.	集団保育の開始年齢が、他の変数との関連において、短期的な発達的結果にどのような影響を与えるかを検討。生後3年目の社会的行動について保育者評定(the Day Care Adaptation Scaleを用いて)、54名の被験児については、親との再会場面を観察。保育の質について評価。一→生後6-12ヵ月および生後18-23ヵ月に保育を開始した子どもは、母親との再会場面においてより多く困難を表出し、フラストレーション耐性が低いと評定された。生後12-17ヵ月に保育を開始した子どもは、関係性における苦痛の表出が少なかった。保育の質と子どもの社会的行動との間に有意な関連が示された。	△

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1996	<p>生後2年目における トラブル：家族の相互作用に ついての3つの問い Trouble in the second year: Three questions about family interaction.</p>	<p>1歳児（第一子、 男児）をもつ69 家族。生後15カ 月と21カ月時に 家族の相互作用 を把握。</p>	<p>Belsky, Woodworth, & Cmic. Child Development, 67, 556-578.</p>	<p>問1：子どもと関わることの困難について。 生後15カ月時と21カ月時に、家族の相互作用におけるナラティブを コード化してクラスター分析。 →相互作用において「トラブルになっている」と同定された家族は、 子どもを統制しようとすることが多く、統制+指導方略を用いること が少なく、子どもはこれらの統制場面において、最も頻繁に反抗を 示し、ネガティブ情動の亢進をもっともよく経験していた。 このような家族の子どものは、生後18カ月時における外的な問題 （'externalizing' problem）の得点をもっとも高く、その母親は 生後2年目を通して日常的な困難をもっとも高く経験していた。 問2：生後2年目におけるトラブルの先行要因について。 育児を規定する9つの測度との関連を検討。 →生後15カ月時と21カ月のいずれもトラブルありとされた群 （n=15家族）、いずれも一時点でトラブルあり群（n=28家族）、 2時点のいずれもトラブルなし群（n=26家族）を分ける要因は、 親のパーソナリティ、子どもの emotionality/気質、夫婦関係の質、 仕事と家庭の関係、ソーシャルサポート（以上、Belsky のモデルに おける育児の規定因）、および社会的階級、各要因の組み合わせである。 問3：生後1年目における非母親養育は、生後2年目にトラブルあり とされた家族の機能性においてリスク要因である、との仮説の検証。 →仮説どおり、リスクの高い・やや高い家族（問2における先行要因 に基づく）では、生後1年以内に週20時間以上の保育を経験していた 場合、生後2年目に家族の相互作用においてトラブルを経験すること が有意に多い。</p>	△

国外文献：アタッチメント研究的アプローチ12

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1996	乳児保育の特徴：肯定的な保育に寄与する要因 Characteristics of infant child care: Factors contributing to positive caregiving.	乳幼児をもつ1153 家庭について縦断研究。	NICHHD (National Institute of Child Health and Human Development) Early Child Care Reseach Network. Early Childhood Research Quarterly,11,269-306.	保育とアタッチメントとの関連を様々な要因により分析。 生後1～15カ月：母親へのインタヴュー、質問紙、家庭での遊び場面。 生後6、15カ月：保育場面上における観察。 生後15カ月：Strange Situation によるアタッチメント測定。 →保育経験の有無によって、生後15カ月時においてストレンジ・シチュエーションの分離場面上における苦痛の表出や愛着パターンに差は見られなかった。アタッチメントの安定性および回避得点に対する保育経験（質、量、入園時期など）の主効果はみられなかったが、母親の敏感性と応答性に対する主効果は認められた。 交互作用が有意になったものによると、母親の敏感性や応答性が低く、かつ保育の質が低く、限度を超える長時間保育を継続しており、複数の保育（二重保育）であるような場合は、安定したアタッチメントが形成されにくい。	△
1997 a	乳児保育が母子のアタッチメントの安定性に及ぼす影響： 発達早期の保育に関するNICHHDの研究結果 The effect of infant child care on infant-mother attachment security: Results of the NICHHD study of early child care.		NICHHD Early Child Care Reseach Network. Child Development,68,860-879.		△
1997 b	乳児に対する非母親養育の特徴に関連する家族の要因 Family factors associated with the characteristics of nonmaternal care for infants.		NICHHD Early Child Care Reseach Network. Journal of Marriage and the Family,59,389-408.		△

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1997	乳児の視点からの保育： 専門家の見解 Infant care from infants' viewpoint: The views of some professionals.	乳幼児精神保健の 専門家による国際 的組織のメンバ ー。	Leach, P Early Development & Parenting, 6, 47-58.	乳幼児保育についての議論は、保育は有害か否かという未解決の問題に 焦点が当てられている。一方で、研究は、ケアのオプションを非現実 的な選択軸（集団保育か母親養育か）に限定していることが多い。 子どもの発達の結果と関連している保育の質とは何か、を明らかに する研究が緊急に必要であり、また乳幼児保育の選択肢について、 広い視野に立つことが必要である。 そこで、乳幼児精神保健の専門家を対象に、生後36ヵ月までの時期に おいて最善だと考えるケアの種類について調査を実施（すべての種類 においてケアの質および利用可能性は同程度に高いと仮定する）。 →驚くべき結果：母親による養育が長期間にわたることが望ましいと された。父親は主要な養育者としてあるいは共同養育者としても ほとんど無視されていた。あらゆる形態の家庭養育はお金のかかる ケアのあらゆる形態よりも推奨されていた。あらゆる形態の個別保育 は、どの年齢においても全日にわたる集団保育よりもよいとされ、 2歳までにおいては半日の集団保育よりもよいとされた。回答者が 乳児にとって最善だとしたケアの形態は、多くの乳児が現在経験して いるものとは大きく異なり、また将来にわたって、政策や世論の 構成員、現場の実践家や親たちが、乳児に対して提供していこうと している保育とも大きく異なっている。	×
1997	教師の親愛的な行動に対する 歩行期幼児の反応の発達 The development of toddlers' responses to affectionate teacher behavior.	10名の 歩行期幼児。	Zanolli, Sandargas, & Twardosz, Early Childhood Research Quarterly, 12, 99-116.	新しい教師と歩行期幼児の愛情システムの発達を検討。 初めての保育開始後40日間の自由遊び場面を観察。教師の微笑・ 親愛的な言葉かけ・親愛的な接触に対する反応を記録。 →教師の微笑は、言葉かけや接触よりも早く受容され、また全期間を 通してもっとも親愛的な反応を引き出した。教師の微笑の頻度は、 親愛的な接触の頻度よりも、教師の接触に対する子どもの親愛的な 反応を予測した。微笑には、互恵的な愛情システムの発達において 鍵となる役割がある。	△

国外文献：アタッチメント研究的アプローチ14

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1997	発達早期における母親の就労とアタッチメントの関連 - 内向的および外向的成人において Relations of early maternal employment and attachment in introverted and extravertive adults.	106名の大学生。	Domingo, Keppley, & Chambliss. Psychological Reports, 81, 403-410.	子ども時代に母親が就労していた成人のアタッチメントの安定性を、検討。母親の就労が子どものパーソナリティスタイルによってどのように異なるかを検討。 子どもの成人後における外向性は、子ども時代における母親の就労が、成人後のアタッチメントに及ぼす影響を緩和すると予測。 Eysenck Personality Inventory, Collins & Read による成人愛着尺度、Scharfe & Bartholomew による青年期の関係性尺度を実施。 外向性の高低によって被験者を2群に分割。さらに、乳児期における母親の就労形態（フルタイム、パートタイム、非就労）によって分類。 →外向性高群においては、乳児期における母親のフルタイム就労が、成人期におけるアタッチメントに有害な結果。外向性の高い成人は、乳児期において母親が継続的に存在していたことをより快適と受けた。一方で内向的な成人は、乳児期において保育を受けることによる母親との分離に対して、より適応していたと考えられる。	△
1997	母子のアタッチメントの危機：早期介入はいかに役立つか Infant-mother attachment at risk: How early intervention can help.	複合的なリスクを抱える家族への介入についての諸研究をレビュー。	Gowen, JW. & Nebrig, JB. Infants and Young Children, 9, 62-78.	ほとんどすべての乳児は、母親あるいは母性的対象にアタッチメントを形成するが、不安・不安定なアタッチメントも多い。複合的なリスク要因を抱える家族の乳児は、アタッチメントの問題を発生させるうえで特に脆弱である。母子のアタッチメントの質が子どもの行動（行動上の問題の発達）の重要な側面に関連しているため、諸研究において、母子の安定したアタッチメントを促進するような介入について検討されてきた。これらの諸研究やアタッチメントの文献、著者の臨床経験から得られる知見は、法律、公衆衛生、早期介入、児童福祉、保育、小児科学、専門的セラピーなど様々な領域における専門家が、母子の安定したアタッチメント形成を促進するうえで有効である。	○

国外文献：アタッチメント研究的アプローチ15

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1998	保育者の感受性とアタッチメント Child care caregiver sensitivity and attachment.	研究1：地域ベースの保育の歩行期幼児50名。 研究2：家庭的保育 (family child care home) の歩行期幼児71名。 研究3：施設型保育の歩行期幼児36名。	Howes, C, Galinsky, E & Kontos, S. Social Development, 7, 25-36.	保育者の感受性における変化と、子どものアタッチメントの安定性における変化とを検討。 →研究1：保育者への教育的介入なし。保育者の感受性に変化はなく、子どものアタッチメントの安定性にも変化なし。 研究2：保育者は保育研修プロジェクトに参加。研修6ヶ月後、子どものアタッチメントの安定性が向上。安定したアタッチメントに変化した子どもと、以前から安定したアタッチメントを形成していた子どもの保育者は、研修後の感受性が向上。 研究3：選ばれた保育者の配置、現職研修を実施。6ヶ月後、子どものアタッチメントの安定性が向上。安定したアタッチメントに変化した子どもと、以前から安定したアタッチメントを形成していた子どもの保育者は、研修後の感受性が向上。	△
1998	子どもと保育者、および子どもと仲間との関係性における連続性と一貫性 Stability and continuity of child-caregiver and child-peer relationships.	55名の9歳児(女児27名)とその母親、教師、友人。	Howes, C; Hamilton, CE & Philippsen, LC. Child Development, 69, 418-426.	母親、教師、友人との関係性の質について、乳児期から縦断的に検討し、関係性の連続性と一貫性について検討。 →9歳時に子どもが認知した教師との関係性は、その関係性についての現在の教師による評価と関連。 母親との関係性についての認知は、乳児期の母親とのアタッチメントの安定性と関連。 教師との関係性についての認知は、最初の保育者とのアタッチメントの質によって予測された。 友人との関係性についての認知は、仲間関係についての preschool の保育者評価および最初の保育者とのアタッチメントの質によって予測された。	△
1998	施設保育の質と保護者・保育者間の調整：施設保育の国家間比較の観点から Quality of center day care and attachment between parents and caregivers: Center day care in cross-national perspective.	オランダの乳児と歩行期幼児43名。	Van Ijzendoorn, et.al. Journal of Genetic Psychology, 159, 437-454.	オランダの保育所におけるケアの質を評価、他のヨーロッパ諸国、カナダ、合衆国と比較検討。母親および父親との家庭での相互作用を感受性尺度によって評価。保育者と親に対して、子育てへの態度および調整についての質問紙を実施。 →オランダの保育におけるケアの質は、他の諸国よりも比較的高かった。よりよいケアの質は、専門的教育を受けたことが少なく経験年数も少ないが年長の保育者、週末あたりの勤務時間が短い保育者との関連が見られた。保育者と親とのコミュニケーションや調整は、ケアの質にとって重要ではなかった。	△

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1998	<p>家族の諸要因と子どもの発達との関連：保育を受けている子どもにとって家族要因の予測力は弱いのか？ Relations between family predictors and child outcomes: Are they weaker for children in child care?</p>	<p>早期の保育に関する NICHD (the National Institute of Child Health And Human Development) の研究に参加している家族のサブサンプル。</p>	<p>Appelbaum, M; Batten, DA; Belsky, J; Booth, C; Bradley, R; Brownell, C; Burchinal, P; Caldwell, B; Campbell, S; Clarke-Stewart, A; Cox, M; Friedman, S; Hirsh-Pasek, K; Huston, A; Kroke, B; Marshall, N; McCartney, K; O'Brien, M; Owen, MT; Phillips, D; Pianta, R; Spieker, S; Vandell, DL; Weitraub, M. Developmental Psychology, 34, 1119-1128.</p>	<p>家族の諸要因は、保育を受けている子どもよりも家庭で親に育てられている子どもの発達をよりよく予測する、との知見に対して、そのように予測が異なるかどうかを検討。 平均週 30 時間の保育を受けている子どもと、母親以外の保育は週 10 時間よりも少ない子どもの 2 群で、発達を予測するために家族の諸要因を検討。 一探索的分析においては 2 群間で異なる結果が見られたものの、多変量解析においては、家族要因が子どもの発達を予測するうえで両群が異なるとい証左は得られなかった。</p>	△
1998	<p>乳児期に母親が就労していた 6～7 歳児の発達のフォローアップ Developmental follow-up of 6-7-year-old children of mothers employed during their infancies.</p>	<p>92 名の 6～7 歳児。 (1 歳時からの縦断研究)</p>	<p>Barglow, Contreras, Kavesh, & Vaughn. Child Psychiatry & Human Development, 29, 3-20.</p>	<p>1 歳時に母親が就労していたか、家にいたかによって、子どもの発達の結果が異なるのかどうかを検討。 6～7 歳時に、仲間とのコンピテンシ (実験室での遊びを評定、心理テスト)、行動上の病理 (問題行動) (母親による報告) を把握。 → 6、7 歳時における問題行動についての母親による報告は、生後 1 年間における母親の就労時間の長さに関連していたが、実験室での遊び場面上における子どものコンピテンシは良好。サンプル全体において、1 歳時のアタッチメントは、母親の就労による不在時間よりも、よりよく 6～7 歳時の自由遊び場面上における社会的コンピテンシを予測した。乳児期からの母親の感受性は、6～7 歳時において問題行動の低さを報告することと関連しているが、しかし、回帰分析の結果では、1 歳時の就労形態あるいはアタッチメントが、早期における母親の感受性に媒介されて 6～7 歳時の問題行動と関連する、との仮説は支持されなかった。</p>	△

国外文献：アタッチメント研究のアプローチ17

発表年	論文タイトル	対象	発表者・発表雑誌・学会	調査内容・結果	効果
1999	困難な生活状況にある子どものアタッチメントの組織化 Attachment organizations in children with difficult life circumstances.	3062組の保育者と子ども（歩行期～就学前期）。多様な民族的背景。子どもの2%は深刻な社会的・情緒的問題ありと診断され、治療的 preschool での療育を受けている。16%は、家庭の貧困に基づく介入を受けている。別の34%は、低所得家庭の子どものための助成による保育プログラムを受けている。	Howes, C. & Richie, S. Development and Psychopathology, 11, 251-268.	アタッチメントQセット (AQs) を用いて、他のアタッチメントの測定法から導出される組織化カテゴリーと概念的に一致し、信頼性と妥当性を備えたアタッチメントの組織化カテゴリーを創出することが目的。特に、困難な生活状況にある子どもたちの不安定なアタッチメントの組織化を説明するようなカテゴリーに関心。保育者とのアタッチメントをアタッチメントQセットにより測定。独立した観察者が仲間との遊びを観察して評定。保育者が behavior problem questionnaires と Student Teacher Relationships Scales に回答。 →AQs を用いて、5つの下位尺度と6つのアタッチメント組織化カテゴリーを創出。これらは、子どもの問題行動尺度や仲間との社会的コンピテンス、保育者が認知した子どもと保育者との関係性と、理論的に意味のある関連が見られた。	△
1999	複数の養育者におけるアタッチメントの関係性 Attachment Relationships in the Context of Multiple Caregivers.		Howes, C. In J. Cassidy & P. Shaver (Eds.) Handbook of attachment. Pp. 671-687. New York: Guilford.	複数の養育者へのアタッチメントがどのように組織化されているのかについて検討。 モノトロピー (Monotropy)、階層的組織化モデル (Hierarchy)、統合的組織化モデル (Integration)、独立的組織化モデル (Independence) を提出。複数のアタッチメントはネットワークを形成し、あるアタッチメントが不安定であるならば、他の安定したアタッチメントがそれを補償するように機能するという「統合的組織化モデル」を支持。	△